

ブレントでの障害児へのサポート

清原 規子

去年の秋から（イギリスでは新年度）、ロンドンの中のブレントという、日本でいえば一つの区のような地域で、障害児たちと働き始めた。私自身は、ブレントの公的な部署―ブレントチルドレンズプレイサービスと協力しながら活動しているブレントプレイアンシエーション及びブレントメンキャップ

という二つの組織に登録し、現在は障害児のための小学校（四歳〜十一歳）でのアフタースクールクラブ（日本で該当するのはおそらく学童保育）、思春期の子どものたちの交流の場としてのジュニアゲイトウェイクラブ、そして十代の子どもたちを抱えている親をサポートする目的で子どもたちとさまざまな活

動を行っているサタデイクラブで働いている。

ブレント地域について

ロンドンの西に位置するブレントは、人口が約二十万人、イギリスの中でも、最も多くの多国籍の人たちが住み、白人が少数派である地域の一つである。主な国籍はアジア人（五十七パーセント）で、特にインド人、バングラディッシュ人、スリランカ人、ネパール人、また中国人や台湾人なども多く住んでいる。特に南部は西インド人の他、黒人も多く、最近では難民なども入ってきていて、ブレントでは約六十種類もの言語が使われているといわれている。大きく二つの地域に分かれていて、北部は富んだ人たちが、南部には貧しい人たちが集中している。

ブレントチルドレンズプレイサービスと

ブレントプレイアソシエーション

学校の中で行なわれているものが教育と見られている中で、学校外でもいっばい学ぶところがあるのではないか、それも「遊び」を通して—そんな思いを基本に、アフタースクールクラブやホリデイプレイスキーム（短・長期の休みの間の遊びのグループ、障がい専用のもある）等の活動を支えていっているブレント地区の公的組織がチルドレンズプレイサービスであり、各アフタースクール等がネットワークを作って構成されているのがプレイアソシエーション（チャリティグループ）である。ただし、これはブレント地域の特色でもあると思うのだが、他の地域では、

このプレイアソシエーションはプレイサービ
スとは全く別のグループ、完全に独立してい
ることが多いのだが、ここではこの二つはほ
とんど同じメンバーで運営されている。

プレイサービスのメンバーが子どもの「遊
び」の重要性を認識、公的機関としては限界
がある部分（たとえば自分たち自身がプレイ
スキームなどを、創り出していく）を、プレ
イアソシエーションを設立することによって
可能にし、そこからいろいろな活動を他のク
ラブにも提供でき、またさらに中身の濃いも
のを創造し広めていこうと常に柔軟に動いて
いる。おそらく、もともとプレイサービスの
メンバーがユースワーカー（十代の子もた
ちとの活動を作っていく遊び仕掛け人）で
あったり、現場で働いてきた人がほとんどだ
からだと思うが、ともすると、いろいろな面で

相対する二つのグ
ループ―行政と民
間―がお互いの思
いを膨らませてい
ける関係であると

いうのは興味深い。特に今、イギリス政府は
政府側から見ると必ずしも必要とは思われな
いそのような活動への補助を減らしていこう
という動きが強まっているので、その中で
個々の小さなクラブにとっては、プレイアソ
シエーションの活動がおそらく重要になっ
てくると思われる。

ブレントメンキャップ

もう一つ、私が登録しているチャリティ
グループのブレントメンキャップ（障害者の
人たちをサポートしている機関）について述



べたい。メンキヤップ自体は一九六〇年ごろに始まり、現在イギリス全国に広がり、それぞれはNationalのメンキヤップに登録しているけれど、いくつかは独立してもいて、プレントのメンキヤップはその一つである。主な活動として、成人のためのグループホームの活動が第一に挙げられるが、障がい児に楽しく遊べる機会を提供していくというのも、重要な活動の一つとなっている。その中で、子どもに視点を置くと同時に、その親へのサポートという点にも視点を置き（おそらく、この根底には、ともに育てていこうという考えがあると思われる）、時には親も自分自身の時間を持てるようにと考え出されたのが毎週土曜日に活動しているサタデイクラブで、この九月から始まったばかりである。

活動としては、子どもたちの自宅までの自

動車での送迎サービスから始まり、ボールプールや大型遊具、センサリールームや美術ルームなどを備えたホールで自由に身体を動かしたり、物を創ったりして遊んだり、時にはテレビやビデオを見て楽しんだり、コンピュータを触ってみたり、また、映画館にいったり、ボーリングをしに出掛けたり等をしてきている。子どもたちは、いつもとは違う空間での違う体験を楽しんでいるようで、ある子どもは、映画に興味はないけれど、そこで食べるポップコーンを楽しむにいたり、いつもは怒ってばかりの子が、センサリールームが大好きで、その部屋の中で気持ちが満たされるのか、出てくる頃には表情が柔らかくなり、私たちへの対応も柔軟になっていたりしている。一人一人に出会うのが楽しみなサタデイクラブだが、親へのサポートでも

あるため、出来るだけ多くの人にこの機会をと、一つのグループが六週間で終わっていくのが残念である。

ジュニアゲイトウェイクラブ

一九七〇年代、イギリス国内でメンキャンプの活動が盛んになると共に、その一端としてゲイトウェイクラブ（ボランティアグループ）というのが、やはり各地に広まっていった。これもやはり、Nationalのものに皆、登録はしているが、独自に活動しているグループがほとんどである。その中のニースデンゲイトウェイクラブが活動している場所が、思春期の子どもを対象にしたジュニアゲイトウェイクラブも参加しているところである。ニースデンのこのクラブは、もともと、障がい児を持った親たちが子どもを連れて集まり、

一緒に色々な活動をしたり、交流するところから始まっていて、キャンプに行った

り、旅行に行ったりなどの活動のほかに、週に二度ほどそこに集まり、子どもが遊んでいる傍らで、親たちが話に夢中になっていたり、そんな交流をするグループであったようだ。それが、子ども達がいつの間にか大人になり、何人かの親は亡くなり、それでもその活動はボランティアの人たちに支えられながら続いていて、週に二日、夕刻に開かれていくこのクラブに集まっている人たちは、十代から五十代までと広範囲である。

ジュニアゲイトウェイクラブは、ブレントプレイアソシエーションが、ニースデンのク



クラブの主催者の人たちと相談しながらこの四月に立ち上げたクラブで、思春期の子どもたち（十五歳から二十代前半まで）を対象に、やはり送迎のサービスから始まり、彼らがいるいろな人たちと触れ合える機会、また、いろいろな活動を体験できる機会を提供している。クラブには、その地域に住む子どもたち

も遊びに来ていたりして障害者と、地域の人とのいい交流の場にもなっている。サッカーやビリヤードをして遊ぶ子や、卓球を楽しんでいる子、絵を描くのに集中している子、友達になりたいと声をかけて欲しいと頼んでくる子や、ちょっとしたスナックを買うのを楽しみにしている子、またビンゴなどのゲームを楽しんでいる子等、それぞれに自分の場所を見つけ、また、成人の人たちが彼らの面倒を見てくれたりしている。このクラブはサタ

デイクラブとは違って、子どもたちのメンバーが増えることはあっても、変わることはないので、毎週一人一人を知っていき、彼らと何を一緒にやっつけていこうかと考えるのはとても楽しみなことである。

イギリスでは、このようなボランティアのグループがかなり多くあり、まずは始めてみようとしてそれぞれの場所で動き始めたものがほとんどである。最近では各地の行政も福祉の分野でいろいろなサービスを充実させてきていて、もちろん問題も多く抱えているであろうが、両者によって、子どもたちが守られ支えられていくことは非常に大事なことと思う。

(ロンドン在住)